

見物される今宮祭

村山 弘太郎

はじめに

本稿は西陣の氏神である今宮神社の祭、今宮祭が江戸期にどのように見物されていたのかについて検討するものである。

今宮祭は現在、毎年五月五日に神幸祭、五月十五日に近い日曜日に還幸祭が行われる。神幸列の中心になるのは三基の神輿と一基の牛車であり、それらの前を剣鉾が供奉する。大規模な祭であるにも関わらず、その知名度は高くない。いうまでもなく今宮祭は都市祭礼であり、祭礼である限りそこには「観る者」、つまり信仰をともしない見物者が多数存在したはずである。⁽¹⁾ そういった見物者たちははたしてどのような関心を持って今宮祭を

観ていたのだろうか。本稿ではこれら見物者の視点からの江戸期の今宮祭を俯瞰したい。

二〇〇〇年代初頭以降、寺社参詣をめぐって生起する諸状況を対象とした歴史研究が進展しつつある。⁽²⁾ ここでは大量の参詣者の恒常的な来訪により、それに対応する寺社および周辺地域で参詣者を相手にする諸経営活動が発展し「観光地」としての性格を獲得するとされ、⁽³⁾ 近世の見物のあり方、とりわけ参詣者を受け入れる側の形成や構造について明らかにされてきた。しかしそこで検討されるのは社寺を中心とした「門前町」や「参詣町」⁽⁴⁾ という常設的な「場」であり、そこで行われる様々な行事やそれにとまない形成される集団などについては検討の余地が残されている。一方でこれらいわば「観光地」と地

域社会の研究の土台ともなっている新城常三の『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』⁵⁾以来、寺院における開帳についてはかなりの蓄積がなされ、その社会的・経済的状況が明らかにされている。しかし神社の祭祀については事例紹介も含めて少ない状況にあるのではないだろうか。

つまり社寺参詣や見物(観光)をめぐる諸問題の中で神社祭祀ははまだ研究蓄積が薄い分野である。

そこで本稿では近世期に著述された名所記・案内記・地誌(本稿では以下「名所地誌本」とする)⁶⁾類に紹介された今宮社および今宮祭を通して当時の人々、特に祭に直接の関わりを持たない人々の目にはそれらがどのように映っていたのかという点を中心に考察を行う。それによりそれら諸研究への新たな事例提供を目指したい。なお本稿の意図することは見物や観光を軸とした地域社会研究とは一線を画する。筆者の関心はどちらかといえば

観光そのものであり、近世の人々にとって今宮祭・今宮神社にはどのような魅力があったのか、近世的な今宮祭・今宮神社の観光的魅力を明らかにしたい。この点を明らかにすることで現代の今宮祭・今宮神社を相対化するこ

とが可能になり、観光という側面ではあまり注目されない理由や原因を検討する材料となりうるためである。

一、名所地誌本にみる今宮神社・今宮祭

(一) 名所地誌本における今宮神社・

今宮祭記述のスタイル

近世の京都は現在の京都と同様に観光都市であり、かつ伝統産業都市であった。それは江戸・大坂への政治的・経済的機能の移動により京都が獲得した近世的性格の一つである。京都の観光都市化と並行するかたちで、名所地誌本も近世の比較的早い段階で成立し著述・出版されていく。現在確認されている最古の名所地誌本である明暦四年(一六五八)に出版された『京童』には、すでに今宮神社が次のように紹介されている。

○今宮

当社は一条のゐんの御時。民多きれいなやまされるにより。むらさき野にやしろをたて、疫癘の神をいはひなだめ給ひし也。さればはじめたてたまひけるにより。今宮と申なり。神馬などひかせら

れし也

しろたへのとよみてぐらをとりもちて

いわるぞそむるむらさきの野に 藤原長能

今よりはあらぶる心ましますな

花の都にやしろさだめつ

同

花ちらす風に長能が歌もがな⁽⁷⁾

『京童』は名所記的性格の強いものであることから、その記述される情報もあまり多いものではないが、一条天皇の時代に民衆が疫病に悩まされたために紫野に社を建てて疫神を祀ったこと、創建当初より今宮と称されていたこと、神馬を牽かせていたらしいことなどがわかる。またあわせて『拾遺和歌集』の編纂にも関与した中古三十六歌仙の一人である藤原長能の和歌が二首あげられている。

次に『京童』と同年に出版された『洛陽名所集』をみると、さらに多くの情報がえられる。

今宮

○此宮は。大徳寺の北なり。

一条院正暦五年。世間疫癘はやり。さわがしう侍り

ければ。御霊会を舟岡山に修せしめ給ひぬ。その、ち。長保三年に。またしづかならざりければ。御輿社を祝て。今宮と号す。御拾遺に。藤原長能の歌に白妙のとよみてくらをとりもちて祝ぞ初る紫の野に。今よりはあらぶる心まします花の都に社さだめつ。との二首有。かの疫癘のときよみしとなり。御霊会は。五月十五日也。前の七日は御出とて舟岡のふもと。下松の御旅所へうつし侍ぬ。そのうち。産人の参詣昼夜をかぎらずにぎはしく茶屋かこひなどしけり。祭礼にはたてほこ十二本もたせ産人供奉しける事なり⁽⁸⁾

『京童』では一条天皇の治世としかなかった創建に関する記述が、正暦五年（九九四）に疫病が流行したために船岡山で御霊会を執行したこと、長保三年（一〇〇一）にふたたび疫病が流行したために神輿および社を造って今宮と号したとされている。また藤原長能の和歌も、疫病が流行したときに詠まれたものであるとしている。

『洛陽名所集』は今宮祭にもふれており、それによると五月一五日が「御霊会」であり、七日は「御出」と称

して「下松の御旅所」に神幸があったこと、御旅所へは氏子による参詣が「昼夜をかぎらずにきはしく」おこなわれ、「茶屋かこひ」などが出ていたこと、もうすでにこの時期には一二本の鉾が成立しており、氏子により供奉されていたことなどがわかる。

これら二書からわかるように名所地誌本における今宮社の記述は、①神社創建の由緒および年代、②藤原長能の和歌、③今宮祭について、④御旅所について、以上の四点が中心となっており、このスタイルは後続する名所地誌本でもその内容に多少の精粗があるものの崩れることはない。つまりこの時期にはすでに今宮神社に関する記述のスタイルは確定していたと思われる。

(二) 名所地誌本にみる今宮神社・今宮祭

以下、後続する名所地誌本から新たにえられる情報を捕捉しながらみていくと、寛文五年（一六六五）出版の『扶桑京華志』⁹では創建の由緒について、正暦五年の御霊会は巷説からおこったこと、長保三年には「疫神祭」が五月九日におこなわれ神馬が奉納されたこと、寛仁四

年（一〇二〇）五月九日に「紫野御霊会」が行われ、これが今宮祭の起源となっているが当時はすでに五月一日におこなわれていたこと、藤原長能の和歌の「とよみてぐら」については「社家者流曰」としたうえで桓武天皇から一条天皇にいたるまでの一七代の間、国政を祈るために幣帛を伊勢太神宮に奉納していたことに由来する「十世御幣（とよみてぐら）」であることなどを記している。そして御旅所については「下松斎場」と呼ぶのが正式であり、御旅所は俗称であること、場所は「雲林院南一町許」にあることが記されている。

延宝五年（一六七七）出版の『出来齋京土産』¹⁰でも今宮祭の説明の中で御旅所の様子を「茶屋のかこひ店屋のうり物。市の棚のごとし」としており、茶屋のみではなく何らかの店屋がでていたことが確認できる。また「御興三社をまつる。近頃は愛塔の宮とて小庇の車に出し絹して。三社の前にまつり渡す」とあることから、「愛塔の宮」と称される車、現在の今宮祭にも供奉する牛車がこの頃に成立していたことがわかる。

貞享元年（一六八四）に書かれた『菟藝泥赴』¹²には今

宮祭の行われる日について「今は五月十五日なり。むかしは七日にさがり松の御旅所に神輿おはして九日に帰座有し。これ御祭り也。彼長保二年五月九日此所鎮座の日なれば近年故ありて十五日となれり」とあり、『扶桑京華志』にも記載された「疫神祭」が今宮祭の起源であること、祭日もその日にちなみ五月九日になされていたものが、理由は明らかにされていないが「近年」一五日に変更されたことが記されている。氏子の範囲や愛塔の宮については「銚十二本、氏子とも町よりも供奉せり。二条堀河より西陣の祭り也。承応の頃より愛宕アイタツマタの宮とて三所の外に小廂こしやの車に下簾してわたし奉れり」と記されていることから西陣の祭であると認識されていたことがわかり、愛塔の宮の車は承応年間（一六五二～一六五五）に成立したと、より具体的な年代があらかになる。

貞享三年（一六八六）出版の『雍州府志』では京都町奉行所と今宮祭の關係に言及しており、「依旧例而從京兆尹寄米五石為祭礼之資料」と「祭礼之資料」としての五石の寄進米が恒例化していたことがわかる。また神輿について、

（前略）一基神輿上鳳凰羽翼之下有延曆四年五月九日之字又傍有作者之名一説古山門有噉許則寄日吉神輿於禁門其事不如願則棄置神輿而歸是謂神輿振倭俗以振字為棄置之義或作振棄此神輿亦自日吉社所棄置之物而以是為当社之神輿云

右のように当時の伝承を伝えている。これによると鳳凰のある神輿には延暦四年（七八五）の銘があり、延暦寺が昔、朝廷に対して強訴をおこなった時に打ち棄ていた日吉社の神輿を今宮社の神輿としたとしている。御旅所については「在二股河西下松則齋場所也」と、その所在地とあわせて『扶桑京華志』と同様に御旅所のことを「齋場」として記している。

今宮神社の様子がわかる挿絵のある名所地誌本で最も年代の早いものは、管見の限りでは元禄一七年（一七〇四）の序文がある『花洛細見図』である。そこには今宮神社境内の詳細が描かれており、特に末社の配置についてくわしく知ることができる。また門前には現在でもある二軒の茶屋が描かれており、この当時にはすでにそれが成立していたことが確認できる。

『花洛細見図』は数種類の諸本が確認されており、その中には今宮祭を描いたものも含まれている¹⁶。それは三本の鉾や神輿、牛車などの祭の部分を描いたものでありその全体を知ることにはできないが、羽織姿で竹を引く人物がいること、行列に子供が含まれていること、母衣といった風流が供奉していることなど当時の祭の様子を知ることができる。そして詞書には、「洛陽の門、聚楽西陣者、おしなへてみな此御神の氏子也。故にさいれいに八二本の鉾をいたし御先にたち、産宮の人麻上下のおりめたかなる出立にてけいごなしめ、手々に引わり竹のすぐなる御代のしるしとぞ。」とあり、氏子である西陣の人々の祭礼への関わり方を知ることができる。

宝永五年（一七〇八）出版の『京内まいり』¹⁷には「当社そのかみわづかの社なりしを元禄甲戌の年御再興有」と元禄七年（一六九四）に何らかの再興があったことが指摘されている。このような指摘は宝暦七年（一七五七）出版の『山城名所寺社物語』¹⁸にもあることから当時としては一般に普及していた話であると思われる。

そのおよそ五十年後の宝暦四年（一七五四）の序文が

ある『山城名跡巡行志』¹⁹をみると、先にみた『花洛細見図』ではその配置が中心になっていた末社の祭神についてさらにくわしく知ることができる。それによると「八社神」について、「八神合祠大國、蛭子、八幡、熱田、香取、鏡作、諏訪」と記されており、また「愛塔宮」については「齋院祠、云相殿宮社三間所祭賀茂、齋院、若宮、昔賀茂齋院在紫野今移此敷」とあり、賀茂の齋院との関係を指摘している。「相殿宮」が「愛塔宮」であることは祭礼に関する記述に「五月十五日古九日又八二十七日御霊会、神輿三基、本社二座天皇一座相殿神輿一基乗牛車、矛数本氏子預之、御出同七日氏子洛中東一条限小川一条下限堀川南限二条西限七本松北至洛陽之限其外鷹峰千束同祭」と「牛車」に乗る神であることからあきらかである。『山城名跡巡行志』では「古」の祭日を五月九日、あるいは五月二十七日としている。神輿に乗せられる神は「本社二座」つまり疫神と祇園牛頭天王、それに天皇（天皇霊か）であるとし、氏子圏あるいは祭礼圏として先にみた『菟藝泥赴』よりくわしい区分とともに、鷹峰・千束の祭でもあったことを指摘している。

御旅所についても今までみてきた他の名所地誌本よりさらに多くの記述があり、そこには「今宮御旅所、在大宮通北ノ頭門南向東有脇門。御興宿南向。作能ノ舞台左ノ脇二有橋懸」とあることから能舞台を備えていたことがわかる。また以前の場所を「旅所、在舞台ノ東二鳥社共、南向。昔在近衛ノ南西洞院獄門町、今遷在此」としている。

さらに『山城名跡巡行志』ではこれまでの名所地誌本では記述のなかった「やすらい花」についても「例祭三月十日花鎮祭是云安楽花祭氏子大賀茂西賀茂紫竹上野大徳寺門前傘鉾踊上野風流巳刻賀茂東西風流未時」と言及している。⁽²⁰⁾

安永九年(一七八〇)、名所地誌本は『都名所図会』の出現で一つの画期をみせる。『都名所図会』はその記載内容の質・量ともに頂点をきわめ、以後各地の「名所図会」本の出版を誘発した。

そのような『都名所図会』において今宮社・今宮祭はどのように記述されているのだろうか。やや長文になるが全文を引用する。

今宮の社ハ紫野にあり。疫の神也。一条院の御宇、正暦五年六月廿七日船岡の山上にまつりけるを。告夢ありて長保二年五月九日此所にうつして今宮とあがめらる。今ハ牛頭天王を勧請して二座なり。

後拾

白妙のとよみてくらをとりもちていハひそ初る紫の野に

藤原長能

弥生十日ハ夜須礼まつりとて、加茂上野の里人鳥帽子素襖やうのものを着太刀をかたげ、笛を吹鉦鼓をならし此社をめぐりてやすらひ花よと囃しける。一説に春陽の節ハかならず疫の神分散して人を悩ますなれば、当社をなだめしづめておどりを催すとなり。又、高雄の神護寺の法華会にハ、加茂今宮ヲ祈念して悪気をなだめんとて踊をなしけるヲ始るとかや。さるゆへに高雄の法花会ハやすらかにてよとはやせしを、いつの頃よりかやすらひ花よあすなひ花よなんともいふ説あり。御霊会ハ五月十五日也。前の七日ハ御出とて船岡山の東なる御旅所へうつし侍る。

また、御旅所に関しては別の項目を立て次のように記述される。

今宮の御旅所ハ雲林院の翼にあり。毎歳五月七日日本社より神輿遷座ありければ、茶店軒をつらね芝居放下師本弓揚弓の音絶へず。十八日神輿あらひにて賑しけることいはん方なし。

『都名所図会』に記述される今宮社の内容は先に確認した名所地誌本における今宮神社のパターンから外れるものではないが、その多くの部分が「やすらい花」の説明に割かれている。これは先述の『山城名跡巡行志』とあわせて考えると、一八世紀中・後期において、その背景までは明らかにできないが、人々の今宮神社に対する認識に何らかの変化があったとすることも可能であろう。あわせて『都名所図会』は御旅所の様子を細かに伝えしておりその状況と混雑振りを想像することができる。

以上、ここでは一七世紀中頃から一八世紀中頃にかけて著述された名所地誌本を通して今宮神社・今宮祭を概観してきた。だがここで留意しておかなければならないことは、これまでみてきたことが一世紀あまりにわたる

今宮神社・今宮祭の変化の累積的な情報であるということである。しかし出版された名所地誌本の中にはその記述内容を大きく変えることなく近世を通じて再版され続けたものもあることから、それらの変化は少なくとも観る側にとっては大きなものではなかったと思われる。ゆえに「観る」という立場に立った場合、ここで確認した今宮神社・今宮祭像は一八世紀中頃の人々の今宮神社・今宮祭に対する認識を表していると考えられることに大きな問題はないだろう。

二、近世期の今宮祭・今宮神社像

(一) 京都町奉行所による今宮社の把握

前章では名所地誌本の記述を通して一八世紀中頃の今宮神社・今宮祭像の確認をおこなったのだが、当時の社会の支配者であった徳川幕府の京都支配機関である京都町奉行所が今宮神社・今宮祭をどのように把握していたのだろうか。またそこには前章で確認した今宮神社・今宮祭像との間に相違点などが存在するのだろうか。そのような点を享保四年(一七一九)頃に書かれた『京都御

役所向大概覚書』（以下『大概覚書』と略す）を中心に確認しておきたい。

まず、社領および神社内の建物についてみると、

山城愛宕郡紫野

一、御朱印社領高百石

今宮社

社地東西百四拾五間 南北百五間

末社 拾貳ヶ所

社拾四ヶ所内 兼帯社壺ヶ所

旅所 壺ヶ所²³

とあり、百石の御朱印社領と、一三の社が神社内に、また別に旅所があったことがわかる。

社領の場所に関してはこの史料のみではわからないが、明治初年の社領改の際、今宮神社神主佐々木樗一郎により作成されたと思われる社領明細書上の写しをみると、紀伊郡石原村に六四石四斗壺升七合、同郡上鳥羽村に三五石五斗八升三合、合計百石の社領が確認される。また、同史料には明治元年から三年の年貢米高と「除地歳入其外ノ諸社納物惣計」を合計したものの分配が記されており、それによると米の分配は、神主佐々木樗一郎、社役

人上田富蔵、神人柳沼庄兵衛、神楽人星野嘉八郎の四人によってなされている。

「除地歳入其外ノ諸社納物」にはどのようなものがあつたのか、現在のところその全体を明らかにできないが、『大概覚書』の「雑色方々人別不相改分洛外寺社門前境内之事」という条項には、

平野門前

拾壺軒

今宮境内門前

拾軒

上賀茂境内町数

七町

五ヶ庄村之内

黄檗萬福寺門前

大和田村

右門前境内之町御朱印知行高、或境内御朱印之内ニ而地子夫役等ハ寺社之面々江相勤候、又者本所入組有之所者年貢本所江収納いたし、夫役者右之寺社方江相勤候、尤諸触等者雑色方内切ニ支配いたし、御仕置者奉行所方申付ル²⁴。

とあることから、門前町などからの収入などもあったと思われる。

神社内の建物について前述した『花洛細見図』の挿絵

をみると、本社、祇園、拜殿二ヶ所、絵馬掛、八社神、愛塔宮、山の神、稲荷、神輿部屋、御供所、神楽殿、別当舎、弁才天の一四の建物が確認できる。この内、山の神は西にある小門を出たところに描かれているため除外するとして、本社を含め建物が一三点存在することは『大概覚書』の記述と合致する。兼帯社は別当舎をさすものであると考えられるが、本社・別当舎を除いた一二の建物を拜殿、絵馬掛、神輿部屋なども含めてすべてを末社と一括して把握していたと思われる²⁶。

次に今宮祭に關してみようと、「洛中洛外神社祭礼之事」という条項に、

東ハ 西堀川限但一条より北ハ
小川通之西側限
一今宮社 氏子 西ハ 七本松通限
南ハ 二条御城番北之方御役屋

敷迄

北ハ 千束村上限

三月十日徘徊花祭

五月七日御出之節神輿三基本社方西江、千本通

筋南江、大徳寺南之道を東江、大宮通旅所江神幸、同月十五日祭礼之節大宮通西江、大宮通北江、五辻ヲ西へ、淨福寺西江入ル町二而御供を備へ、夫方五辻東江、大宮北へ野江出、大徳寺南之道を西江、千本通筋北江本社江帰座、

町数凡三百四五拾町、村数拾ヶ村程²⁶

とあり、『山城名跡巡行志』で確認したのと同様の氏子圈の把握とともに、今宮祭の正確な巡行ルートを知ることができるといえる。

今宮祭への京都町奉行所の関わり方についてみると、「町代勤方之事」に「今宮神事ニ西陣町代罷出候」とあり、また「上雑色勤方之事」のうち「雑色警固ニ罷出候覚」には「十五日今宮祭二方内方下雑色四人罷出候」とあることから、今宮祭には支配機構の末端存在である町代・雑色が出向き、その警固などを担当していたことがわかる。

『雍州府志』で「祭礼之資料」として寄進米があったことを先に確認したが、それについては「御祈禱料并御下行米渡り方之事」に「今宮神馬料²⁹」とあることから、

名目的には「神馬料」であったことが確認できる。

このように『京都御役所向大概覚書』を通して京都町奉行所による今宮神社・今宮祭の把握をみると、その史料的人格ゆえに社領や町代・雑色の今宮祭における動きなどについては名所地誌本以上にくわしく知ることができるが、それら以外に関しては前章で確認したこと以上の知見はない。特に創建の由緒などに関しては『京都御役所向大概覚書』からはまったく知ることができない。これは、京都町奉行所にとってそれらの情報は業務の遂行になんら意味をなさないことから、把握する必要がなかったためであるだろう。また名所地誌本とあわせて考えた場合、氏子圈・祭礼圈や境内末社などの把握に相違はなく、名所地誌本の情報の正確さを裏付けることができる。

(二) 遊興の場としての今宮祭

これまで名所地誌本、『京都御役所向大概覚書』の記述にしたがって近世中期における今宮神社・今宮祭がどのように観られ、また把握されていたのかを確認してき

た。ここでは今まで確認してきたことをもとに、今宮神社・今宮祭についてその内容を整理しておきたい。

① 由緒

一条天皇の御宇、正暦五年に疫病が流行したため六月二十七日船岡山で巷説からはじまった御霊会がなされ「疫の神」が祀られた。その七年後の長保三年にふたたび疫病の流行があったため(『都名所図会』のみこの経緯を「告夢」^{ゆめのつひ}があったためとする)、五月九日に船岡山から紫野に「疫の神」を移して疫神祭がなされ、その際今宮と号して社殿と神輿が造られ神馬が奉納された。またこの時藤原長能による和歌が詠まれる。さらにその一九年後寛仁四年五月九日に「紫野御霊会」がおこなわれた。その後荒廃していたものが元禄年中に再興される。主祭神は疫神であり、時期は不明であるが牛頭天王が勧請されて本社の西側にその社がある。

② 今宮祭

起源は長保三年の「疫神祭」、あるいは寛仁四年の「紫野御霊会」とされ、祭日もこれにちなみ元来五月九日であったが延宝年間以前に一五日に改められた。七日

は「御出」と称され疫神、牛頭天王、天皇（天皇霊）の神輿三基が御旅所へ移され、その際「小廂の車」と称される牛車が神輿の先にたち、さらにその前に氏子預かりの一二本の鉾、および麻袴姿の氏子が「わり竹」を手に供奉する。それを支えた氏は西陣全域と鷹峰・千束といった今宮社北西部の村々である。

京都町奉行所からは「神馬料」の名目で祭りに際して米五石が寄進され、町代と雑色が警固などを目的として出向する。

③ 御旅所

所在地は「大宮通北ノ頭」または「雲林院南一町許」であり、「下松の御旅所」とも呼ばれ「斎場」であるともいう。南向きに門が開かれ東に脇門を有する。内部には南向きの「御輿宿」と橋架けのある能舞台があり、その東側に御旅所の建物がある。

祭りの期間中には御旅所内に飲食の場である「茶屋」や物売りの「店屋」がまるで市のようにだされて、そこに「芝居」「放下師」「本弓」「揚弓」などが集まり、氏子たちは昼夜を問わず参詣して御旅所は大きな賑わいを

みせた。

当時の人々の見聞による今宮神社・今宮祭像はおおむねこのようなかたちになるのではないだろうか。このなかで特に注目されるのは御旅所の様子である。御旅所はまるで総合的な遊興場のような様相を呈し、そしてそれらをも目的としたのだろう、多くの人々が御旅所へと集まり、参詣とともに茶屋や芝居を楽しみながらもその混雑ぶりに辟易したのではないだろうか。

文化三年（一八〇六）板行の『諸国年中行事大成』をみると、その年の行事町を中心とした氏子の町々が「町中家毎に表を飾り幕を打、金屏風を立或は立花生花の物好舗には毛氈敷並べ其余諸器物^{せん}和漢の奇品を集め、六日の夜は殊更灯燭を煌し、山海の珍味を具へ賓客を対へて饗応す。京師の神事所々とも期のごとく華美を尽せりといへども、此行事町は格別にて其町例年の光景とは別格なり。何れの町はケ様に有しなど互に美を争ふ事なれば、其華美なる事知ぬべし」と、今日でも祇園祭にみられる屏風祭を神事行事町が互いにその華美を競って他の神事とは別格とされるほど華やかに行っていたことがわかる。

その見物人のために西陣の町々も賑わっていたことだろう。

巡幸列については、これまでみてきた史料では『花洛細見図』の絵図以外にはその様子を知ることができないが、ベルリン東洋美術館が所蔵する『紫野今宮祭図巻』をみると、『花洛細見図』でみた風流のほかに松や立花、布袋の像を乗せた車や、花傘、赤熊姿なども描かれており、巡幸列の全体前後左右を麻袴姿で「割竹」を引く人々が警固している様子がわかる。また『諸国年中行事大成』には五辻通浄福寺付近の町内を巡行する巡幸列の様子が描かれており、幕が張られた家々の間を「蝶鉾、葵鉾、蓮鉾、劔鉾、龍鉾、沢瀉鉾、牡丹鉾、柏鉾、菊鉾、びハ鉾、松鉾、扇鉾」の一二本の鉾を先頭に、「神馬、御太刀、御柵、社司輿、から櫃、桐との御車、行事町、注連竹、社司のつと、神輿」の順に巡幸列が続き、遠くに御旅所の様子もみえる。御旅所について「旅所境内并構外北の野辺に至り茶屋、酒行、見物、上竿伎、浄瑠璃、放下、楊弓の類ひ小屋を建ならべ、昼夜遊観の人爰につどひ、其体四条川原夕涼のごとし」とあることから、当時

有名だった四条河原の夕涼みの混雑に匹敵するほどの人出があったことがわかる。前述の『洛陽名所集』では御旅所に集まる人々は氏子の参詣であるとしていたが、ここでは特にそのような限定がないことから、氏子でない人々も御旅所に集まっていたと思われる。

盛大な巡幸列とそれを迎え入れる飾り付けられた氏子の家々、そして多くの人々を引き付ける御旅所。これらは今宮祭の重要な要素であった。巡幸列に直接供奉する人々はもちろん、供奉はしなくても家の表を幕で飾り、屏風を立て花を生け来客を山海の珍味でもてなした氏子たちもまた祭りの参加者であり、巡幸列に供奉することと同様の満足感をえていたことだろう。巡幸列や飾り付けられた家々を見物してまわる人々や御旅所に集まる人々も、今宮神社の氏子であるか否かを問わず祭礼の一部を構成する要素であり、そこには今宮神社・今宮祭を軸とした一体感が生じていたと考えられる。

見物人とそれを迎え入れる人々。今宮祭はまぎれもなく西陣を中心とした「祭礼」であった。

むすびにかえて

以上、本稿では主に名所地誌本を通して今宮神社・今宮祭は同時代の人々にどのように認識されていたのかを確認してきた。そしてそれが西陣を中心とした「祭礼」であったことを明らかにすることができた。ただ史料を羅列しただけのものであり残された問題も多いのであるが、ここで確認してきたことの諸点は今後今宮神社・今宮祭を研究していくうえでの着眼点の一助になりうると考える。最後に、新撰組の前身である浪士隊を編成した清河八郎が幕末の京都でみた今宮祭の姿を通して旅行者の目に映った今宮祭を紹介することで本稿のむすびにかえたい。

清河八郎は安政二年（一八五五）三月二十一日、庄内藩の城下町鶴ヶ岡（現山形県鶴岡市）を母と下男の三人で伊勢参宮の旅へと出立し³⁵、その帰路五月上旬に一行は京都を訪れた。五日に奈良方面より宇治に至り、藤森祭を見物したあと清水寺、祇園社を観光し六角の筑前屋という所へ宿泊した。六日は一日中買物などをして過ごし、

七日、早々に大坂方面へ出発しようとしたところ親しくしていた帯屋の手代直七がその日に今宮祭があることを告げたため出発を一日遅らせて見物に向向いた³⁶。その様子日記に、次のように記している。

（前略）夫（般舟院―筆者注）より暫く歩みのほり、市外にて今宮御旅所をすぎ、大徳寺の先にて今宮となる。堂はさらに美事にもあらず。傍山にそひたる処なり。三月十日にも祭礼あり。当十五日は本祭礼にて、氏子も夥しく多く、今日は氏子中より御迎いで、御輿を御旅所に移すなり。銚も拾二本ばかりいで、高銚にて金銀をちりばめ、さきに剣をながくそびへさすなり。拾二本ともかたち同じけれども、少々ものたがひあり。何れも耆人持にて、剣先に鈴あるがゆへにちりんちりと声をいだし、妙にをもしろきありさまなり。御神輿は四体ありて、耆ツは作りかた異にして、御所車にて牛にひかするなり。何れも京都にては美事といふべきにあらざれども、他国のものは目をおどろかすなり。

（中略）大徳（寺）前にいたり茶屋に休みしに、少

しく雨ふり来りければ、群集せし見物も傘にて大き
わぎいたし、されども間もなく鉾くねきたり、参拝
いたしたる事妙なり。

雨しきりにいたりければ、御旅所の前なる茶店に
いたり、幸ひ直七知合の者あれば、其家に直七同道
まいられ、傘・木履などたづさへいたりぬ。

まもなく御神輿きたり、社中大にぎわひをなせり。

(後略)

以前にも京都へ来た経験があり、他の祭礼も見ていた
清河八郎にとって今宮祭の神輿は多少見劣りしたように
あるが、他国のものと比べればすばらしいものであると
いう感想をのべている。そして今宮祭の特色である剣鉾
については、鈴の「ちりんちりん」と鳴る音に風情を感
じながら聞き入っている。あいにくの雨に降られながら
も神輿が御旅所に到着するまで見物してから宿へ帰るの
だが「宿より凡今宮まで壺里半もあらん。帰路は殊の外
ながく思ひき。」と、雨や人込みによる疲れの色がみえ
るが十分に楽しんだ様子である。

今宮祭はこのように見物客にとっても魅力ある祭礼で

あった。

注釈

(1) 祭礼における観客の存在については柳田國男「日本の
祭」(本研究ではちくま文庫版『柳田國男全集』一三
一九〇を参照)、守屋毅「都市祭礼と風流」(日本民
俗文化大系一「都市と田舎」〈小学館 一九八五〉所
収)などを参照。

(2) 青柳周一『富嶽旅百景』(角川書店 二〇〇一)、地方
史研究協議会編『都市・近郊の信仰と遊山・観光』(雄
山閣 一九九九)など。

(3) 青柳周一「近世における寺社の名所化と存立構造―地
域の交流関係の進展と維持―」(『日本史研究』五四七
二〇〇八)参照。

(4) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房
一九八二)参照。

(5) 前掲注(4)。

(6) 竹村俊則編『日本名所風俗図絵』八 京都の巻Ⅱ 角
川書店 一九八一

(7) 『新修京都叢書』第一卷(臨川書店 一九六二) 四四〇
四五頁。

(8) 『新修京都叢書』第一卷(臨川書店 一九七六) 四二
四〇四五頁。

(9) 『新修京都叢書』第二卷(臨川書店 一九七六) 三五
頁。

- (10) 『新修京都叢書』第一卷（臨川書店 一九七六）五二—一〇五二頁。
- (11) 現在牛車は西社町が供奉するが、西社町は神事行事町を勤めているため、近世段階での守護主体は現在のところ不明である。神事行事町については拙稿「近世京都における祭礼運営と町組—西陣・今宮祭を事例として—」（京都外国語大学『研究論叢』八六 二〇—一六）参照のこと。
- (12) 『新修京都叢書』第二二卷（臨川書店 一九七六）四八—四〇よび四八七頁。
- (13) なお、ベルリン東洋美術館に所蔵される『紫野今宮祭凶巻』について、森谷尅久氏はその制作年代を元禄前後としているが（檜崎宗重監修『秘蔵浮世絵大観』一二—講談社、一九八八）、そこには「小廂の車」と思われる牛車が描かれている。
- (14) 『新修京都叢書』第一〇卷（臨川書店 一九六八）一三六—一三七頁。
- (15) 『新修京都叢書』第八卷（臨川書店 一九六八）三〇—三〇五頁。
- (16) 前掲注(15) 書所収の野間光辰氏の解題参照。
- (17) 『新修京都叢書』第五卷（臨川書店 一九六八）四五—二頁。
- (18) 『新修京都叢書』第二二卷（臨川書店 一九七六）六一—三〇五頁。
- (19) 『新修京都叢書』第二二卷（臨川書店 一九七六）三五—五〇よび三三七頁。
- (20) 「やすらい花」に関しては河首能平氏による研究や（「やすらい祭の成立」（『日本史研究』八一—三七・一三八））、芸能史研究会による調査報告（『やすらい花調査報告書』、一九七七）などがあるものの、やはり近世社会におけるその位置付けはいまだ明確になされていない。近世期の今宮神社を考える場合「やすらい花」も当然大きな問題になってくるのであるが、論旨からはなれるためにその考察は別稿をたてたい。なお、今宮神社の神輿蔵の鍵を預かる「鍵取」を勤める「上野新兵衛」は「やすらい花」においても今宮神社北東に位置する上野村の代表を勤める（「上野新兵衛」の子孫、上野新三郎氏の御教示による）。今宮祭とやすらい花の関係についても考える必要がある。
- (21) 『新修京都叢書』第六卷（臨川書店 一九六七）六九—八〇よび七〇三頁。
- (22) 岡田信子他校訂『京都御役所向大概覚書』（清文堂出版 一九七三）上巻九七頁。
- (23) 京都府総合資料館所蔵文書 館古二四三。
- (24) 前掲注(22) 書、上巻二一八—二一九頁。
- (25) 明和八年（一七七二）十一月の触に今宮境内欠所屋敷の払い下げがあることから（京都町触研究会編『京都町触集成』第四卷〈岩波書店 一九八四〉触番号五六—一、境内にはこれら以外にも建物があったと思われる。
- (26) 前掲注(22) 書、下巻二〇頁。
- (27) 前掲注(22) 書、上巻二四四頁。
- (28) 前掲注(22) 書、上巻二三〇頁。なお、京都の祭礼で

の雑色の動きは今後究明していくべき課題である。

- (29) 前掲注(22)書、上巻三九二頁。ところで京都氏歴史資料館が所蔵する『今宮神社文書』には室町期に足利将軍家より送られた神馬の送り状が多数確認できる。支配者から神馬あるいは神馬料の送付が定式化したのはこの頃だろう。

- (30) 儀礼文化研究所編『諸国凶会年中行事大成』(桜楓社一九七八)所収。

- (31) 前掲注(13)。
(32) なお現在では一般的にはこのような祭礼時のしつらえはなされない。一部幔幕が張られる家もあるが、多くは御神灯の提灯すらあげていない。

- (33) 前掲注(30)。
(34) 昭和三〇年代頃に少年期を過ごした方に話を伺うと、当時は今宮祭に他所の親戚を家に招き、二階の窓をは

ずしてそこから巡幸列を見物しながら鯖寿司を食べていたという。また戦前生まれの方によると、少年時代には今宮祭の日のみに朝から開いている銭湯へと向かい、その後小遣いを親から貰い「オタビ(御旅所)」で遊んでいたという。やはりこちらも家には他所の親戚を招いていた。なお近年は巡幸路に面した場所に店を構える西陣織業者の中には得意先や顧客をそこへ招き、着物姿で今宮祭を見物させているところもある。店舗がいわゆる京町家であるため、幔幕を張り巡らせ格子を外し「ミセノマ(店の間)」に赤毛氈を敷いたそのしつらえは往時をしのばせるものがある。

- (35) 清河八郎著、小山松勝一郎校注『西遊草』(岩波文庫一九九三)解説参照。

- (36) 前掲注(35)書、一四三〜一五一頁。以下引用はすべてこれによる。

